

二大特産物に異変



改元に伴う10連休の後半が始まった5月は、あっという間に下旬を迎えた。行楽疲れや、たっぷりあった休日を持て余した人もいたようだが、季節の歯車に連休はない。21日は二十四節気しよくせいきの「小満」、命が次第に

満ち満ちていく頃のこと
で、草木も花々も動物も虫も陽光を浴びて輝く季節である。

気候と自然に恵まれた静岡の特産物にお茶とサクラエビがある。例年だと、この季節に輝く二大特産物に今年は「翳り」が見られる。

日本一の茶集散地、静岡市の茶問屋街にある静岡茶

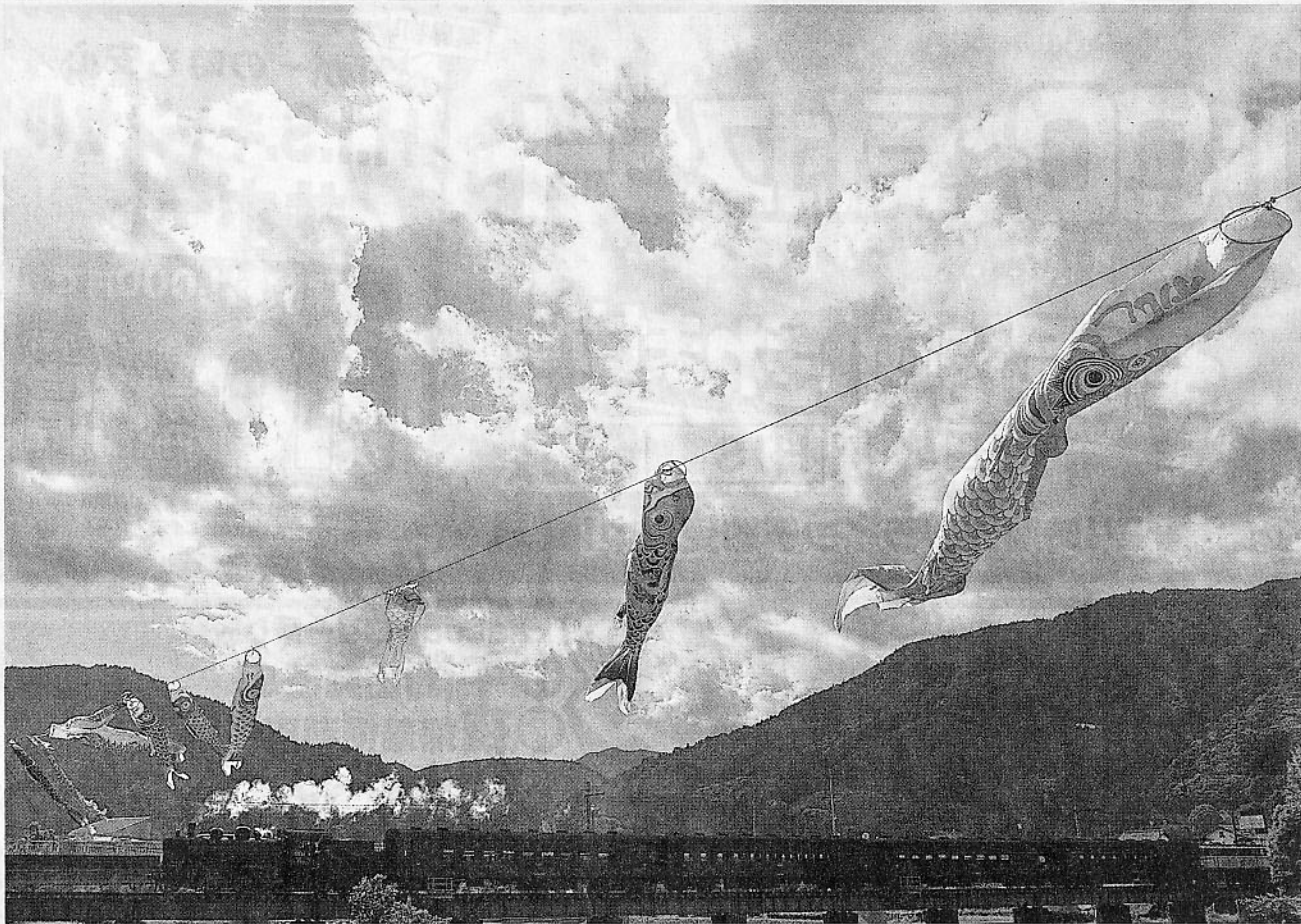
市場で「新茶初取引」が行われたのは4月19日だった。今年は茶摘みが最盛期となる5月のゴールデンウィークが改元と重なることから、茶業関係者の期待は膨らんだ。ところが、春先の天候不順の影響で静岡茶市場の取扱量は前年同期比の60%前後と低迷し、「十八日夜(2日)の新茶商戦」も相場が振るわず、生産者にとっては減産・価格安のダブルパンチとなった。

駿河湾特産のサクラエビも昨年から記録的不漁が続いており、今年の春漁も試験的な収穫を余儀なくされた。その中で不漁の原因調査が本格化し、駿河湾にそぐ富士川水系の濁りについて不漁との因果関係を究明する静岡・山梨両県の合同調査も始まった。全国唯一の水揚げを誇ってきたサクラエビが、初めて直面した試練である。

今年「静岡茶」にとって記念の年。明治維新で失職した徳川家臣らが荒地地だった県中部の牧之原台地に入植して150年になる。今も全国一の「お茶王国」だが、県内の茶産地は一律に深刻な後継者不足の悩みを抱えている。

「川根茶」の産地で知られる大井川上流の河原で5月、地域の子供たちの成長を願って、約80匹のこいのぼりが大空を泳いでいた。見上げる茶摘み農家の人たちを、ほのかな香りが包み込んだ。

(前静岡県監査委員・富永久雄)



茶園に泳ぐこいのぼり＝島田市、全日写連・竹井晴彦さん撮影